# 『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第５７回】

前回は、父なる「神」、子なる「キリスト」、「聖霊」は〈唯一の神の、三つの異なるあり方〉であるというお話を書きました。そこで山浦玄嗣（はるつぐ）先生の解釈をご紹介しましたが、まだ十分ご説明できなかったので、まずはそのことから始めます。

## ✞　「１＋１＋１＝１」なんです …‼?　『三位一体論（さんみいったい）』とは　（２）

**「ものごと調和の法則」**

『三位一体』の「一体」という言葉も誤解を受けやすいですね。『「一体」という漢字から受ける印象は、神さまを一個の実体のある〈もの〉としてとらえさせてしまう欠点があ』ると、山浦先生はお書きになっています。神さまは、実体のある**「もの」**ではありません。

ここでちょっと「三一論」からはなれて、山浦先生の「ものごと調和の法則」という話を聞いてください。これを読むともっとわかりやすくなります。

※**お願い**：今回のお話は、いつもより「ゆっくり」・「じっくり」・「腕まくり」してお読みください。「ざっくり」お読みになると、書いてある内容が「しっくり」きません。頭の中がゴチャゴチャになってよく理解できず「がっくり」してしまい、「こっくり」を始めてしまうかもしれません。文字を覚えたての幼子が、一つひとつのひらがなを拾い読みするように ― といったら大げさですが…。そのようにお読みいただければ、山浦先生の「三位一体論」に関する解釈に、「へぇ、こういうことなのか！」と「びっくり」したり、こころが「ほっくり」あたたかくなるはずです。

イエスは時々、「あまりよく意味がわからないこと」や「私たちにはその話の意図が理解できないこと」を話されました。『聖書』にはそんな箇所がたくさんあります。たとえば …

✝**『わたしは道であり、真理であり、命である。』**（『ヨハネ』14 章 6 節）

これ、意味がわかりますか？　たとえば、わたしが「わたしは真理です」と言ったら、「おいおいみねさん、この残暑のせいでおかしくなっちゃったんじゃない …」と思われてしまうでしょう。「わたし」というのは、一人の人間であり、手足もついていて、言葉もしゃべります。タイガースの試合を見ながら一喜一憂し、沖縄が日本政府に「植民地扱い」されているのを見て激怒します …というように、「実体のあるもの」です。

「真理」とはなんでしょう。辞典によれば『ほんとうのこと。正しい道理。だれもが正しいとする事実や法則。』（『角川必携国語辞典』）とあります。ということは「わたし」が「真理」という「こと」になってしまいます。道理や事実、法則という頭の中で考えた「こと」、「概念」になってしまいます。そこには「実体」はありません。目で見ることも、手で触れることもできません。「わたし」という**「もの」**と「真理」という**「こと」**が、「は」で結ばれて「イコール」になってしまいます。意味がよくわからない、筋の通らない日本語の文ですよね。「わたしは道である」や「わたしは命である」も同じです。

そこで山浦先生は、**「ＡはＢである」**という形の文のＡとＢに、いろいろなものを入れてみたそうです。「わたしは男である。」「男は船乗りである」「その船乗りは漁師である」― すべて意味が通じます。ＡもＢも実際に存在する「もの」の組み合わせです。

これはどうでしょう。「わたしは勇気である。」「海は絶望である。」― 何を言おうとしてい

る文かよくわかりません。「わたしは勇敢な人間だ」、「海を見ると失恋を思い出してしまい、悲しくなる」… という意味かもしれませんし、「勇敢すぎて法(のり)を超えることもある」、「漁業にとって未来は暗い」という意味かもしれません。Aは「もの」、Bは「こと」の組み合わせです。この文の内容を憶測はできても、その意味を特定できません。

山浦先生は、Aが現実に存在する**〈もの〉**、Bが現実には実体として存在しない、心で考えた**〈こと〉**を表す名詞とし、前者を**「もの名詞」**、後者を**「こと名詞」**とします。そうすると、

○**「〈もの〉は〈もの〉である」**という文(「わたしは男である。」)は、意味を持つ文になります。

○**「〈もの〉は〈こと〉である」**という文(「わたしは勇気である。」)は、解釈によってはいろいろな意味にとれます。きちんとした意味をもてない文になってしまいます。

○**「〈こと〉は〈もの〉である」**はどうでしょう。

「愛は雑巾である」「恋はサクラソウである」― わかったような、わからないような文です。「愛は雑巾のように、汚れきった人間の心をきれいにしてくれる」とも受け取れますし、「愛なんてモンは、所詮、雑巾のようにボロボロになっちまうものさ」とも考えられます。「〈もの〉は〈こと〉である」という文と同じで、非論理的だと言えます。

○**「〈こと〉は〈こと〉である」**はどうでしょう。

「愛は献身である」「恋は自己満足である」― 「いやいや、ギブ・アンド・テイクだよ」、「相手だって満足してるさ」と思う人もいるかもしれません。事の当否はさておき、文としては意味が通ります。

以上のことから、「AはBである」という文では、AとBは**共に〈もの〉**である、あるいは**共に〈こと〉**である、という**同質の名詞同士の組み合わせの時には意味のある文が成立**し、**異質の名詞同士の組み合わせでは意味のある文にはならない**ことがわかります。山浦先生はこれを、**「ものごと調和の法則」**と名づけています。

## ギリシャ語の「名詞」の特性について

なぜこの「ものごと調和の法則」に反する文が聖書には多いのかという疑問に対して、先生はギリシャ語の名詞がもつ特性を説明しておられます。『日本語の名詞は常に存在するものごとという認識から離れられない』が、ギリシャ語という言語は『名詞を〈もの〉と〈こと〉に峻別するという感覚を発達させていず、「ものごと調和」を破っても平気な顔をしている言語』だと指摘されています。

わたしはギリシャ語を学んだことがありません。書店で『ギリシャ語入門』という本を手に取ってみたのですが、「これを読んでいたら、いつまでたってもこの回が終わらん」とわかり、山浦先生の文章を、メモを取りながら繰り返し読みました。わたしの解釈に間違いはないかどうか神父様に確認していただきました。「これで大丈夫ですよ。」とおっしゃっていただきました。「ゆっくり・じっくり」お読みください。

『わたしは羊飼いである』という文があります。「主語」はもちろん「わたし」という〈もの名詞〉です。「羊飼い」も〈もの名詞〉です。主語「わたし」は「羊飼い」であると規定しています。「A(もの)はB(もの)である」という文ですから、「ものごと調和の法則」にかなっていますので、意味が通じます。

ここからがチョットややこしいのですが、ギリシャ語では主語の「わたし」を規定する「B」に

あたる名詞(「羊飼い」)を、「**主格補語**」と言います。「名詞」なのですが、ギリシャ語では**「述語」として把握され、主語(A)の本質を明らかにする役割**があります。日本語の感覚では、名詞は常に「存在するものごと」を表しています。ですから、「わたしというもの(実体的存在)は、羊飼いというもの(実体的存在)である」という意味になり、理解できる文です。

次に『わたしは真理である』という文を考えてみましょう。「わたしという**もの**(**実体的**存在)は、真理(**概念的**存在)という**こと**である」というと、「ものごと調和の法則」に違反して、意味の通らない文になってしまいます。ですから、『ギリシャ語文の主格補語となっている名詞を日本語の名詞で翻訳してはいけないのです』と山浦先生は書いておられます。

**『<u>主格補語となっている名詞の表わす内容</u>を、<u>日本語では</u>主語の属性を表わす言葉、<u>動詞あるいは形容詞、形容動詞で表わさなければなりません</u>』**。

では、**『わたしは真理である』**という文は、先生によってどう訳されたか ―

『「真理」とは「ある物事に対して例外なく当てはまり、それ以外には考えられないとされる知識や判断」であり、聖書の文脈から「ある物事」とは、「人間が本当の意味で幸せになること」と考えられるので、**「わたしは、誰でもが幸せになる、なり方を知っている」**ということになります』。

次に、**『わたしは道である』**とはどういうことでしょう。「道」とは何かを考えると、『道は人間を目的地まで導くものです。この場合の目的地とは「本当の幸せ」です。それがわかれば、「道」という名詞にこだわる必要はありません』。そこで山浦先生はこの個所を**『わたしは、人をまことの幸せに導く』**と訳します。

**『わたしは命である』**はどうなるでしょう。『「命」というのは「ものを生かす力」のことです』。だから、**『わたしは人を活き活きと生かす』**という意味になると先生はおっしゃいます。**「〈もの〉は〈こと〉である」**という元の文が、意味が通じるものになっていることがおわかりになると思います。　いかがでしょうか？　意味がよくわからなかった言葉が、まるで目の前でイエスが語ってくれているように、スッと心の中に沁み込んでくるような気がするのはわたしだけでしょうか？

**「慈しみ」・「思い」・「働きかけ」**

ここで再び、山浦先生の『神さまもそのお姿に三つのお顔がおありなさるのです』というお話に戻りましょう。「三つのお顔＝父・子・聖霊」とは、どんな姿をなさっているのか、先生は次のように書いておられます。

「父」と呼ぶ第一の姿は、『**「慈しみ」**です』。天地のすべてを造られたのは、いつも慈しむ対象を求めてやまない神さまの本性である「慈しみ」ゆえだといいます。「対象」とは私たち人間はむろんのこと、神さまがお造りになったすべての被造物です。

『31 神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。』(『創世記』1章)

「子」と呼ぶ第二の姿は、『神さまの熱い**「思い」**です』。神さまの「思い」がイエスをこの世に派遣し、人間に罪を悔い改めさせ、自らその罪を贖い、人々を永遠の命に導いたのです。

『神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。』(『ヨハネ』3章6節)

「聖霊」と呼ぶ第三の姿は、『神さまの慈しみから発する熱い思いを運ぶ**「息吹」**、つまり**「働きかけ」**のことです』。

『17 まことを語る神さまの息が、風のようにお前たちを包(つつ)む。[助っ人さまとはその息だ。]
(中略) そのお方はそなたらの間に今いなさるし、そなたらといっしょにこれからもいなさる。』(『ヨハネ』14 章)

慈しみ深い神が天地万物をお造りになり、その被造物、特に人間(私たち！)を愛する思いが「イエス・キリスト」として自らをこの世に現わし、今もその思いを「聖霊」として私たちに注いでくださっている。だから「神・キリスト・聖霊」は、本質は「ひとつ」なんだ ― これが「三位一体」という教義になります。

日本語の「神さま」という言葉は「もの名詞」です。だから、世界の本質は物質であるとして物質から離れた精神などの存在を認めない「唯物論」を主張する方は、「神がいるっていうのなら見せてみろ。証明しろ！」と迫ります。しかし、原語であるギリシャ語の特性をみておわかりのように、「神さま」(あるいは、その「姿」)とは、実体のある「もの」ではなく、本来そのものの「ありよう(在り様)」という「こと」を表わす言葉です。

山浦先生はこう書いておられます。『神さまと被造物との関係においてはこの「ものごと調和の法則」が逆転してい』て、『〈もの〉は神さまが「思う」という〈こと〉によって存在するのです』。前回ご紹介した『ヨハネ』1 章をもう一度お読みください。

……

『初めにあったのは神さまの思いだった。思いは神さまの胸にあった。その思いこそ神さまそのもの。初めの初めに神さまの胸のうちにあったもの。神さまの思いが凝(こご)ってあらゆる物が生まれ それなしに生まれた物は一つもない。』

……

ですから、<u>私たちが「神さまを知る」ことができるのは</u>、見たり触ったりできる〈もの〉としてではなく、<u>毎日の生活の中で起きる「できごと」を通してだけ</u>と言えます。

今年の上智大学夏期神学講習会で、上智大学の武田なほみ先生の『人を生かす神の知恵』という本を買いました。月刊誌『福音宣教』で 2013 年から 2 年間掲載されたものを加筆修正された本です。一昨年、講習会でお話しする機会があったとき、「ぜひこの連載を本にしてください！」とお願いしました。その願いが今夏、実現しました。日常生活の中で神さまがどのように「働きかけ」をなさっているか ― をあらためて知ることができる本です。ぜひ、ご一読ください。第 17 章の一部をご紹介します。

『今、与えられている現実を素の姿で受けとる恵みを願いたい。そしてその現実の内に入ってこられ、私たちの限られた営みを受けとり、完成へと導いてくださる方にゆだねることを、日々学びたい。<u>その日の出来事の内に、神の働きと救いのしるしを見出す日が与えられますように</u>。』

「三位一体」の神さまはいつも私たちに語りかけ、導いてくださっています。心を開いて全身で受けとりましょう。神さまの「慈しみ」から発する「熱い思い」がもたらす「働きかけ」を！

【引用・参考にした書籍】 ・山我哲雄 『キリスト教入門』 ・『角川 必携 国語辞典』
・山浦玄嗣 『イチジクの木の下で(上・下巻)』、『ガリラヤのイェシュー』
・武田なほみ 『人を生かす神の知恵』(オリエンス宗教研究所、2016)